KUTANism
産地のオンラインミュージアム

LIBRARY #06

秋元雄史がゆく、九谷焼の物語

第六話

【後編】窯を超え出て生まれた名工たち ～明治から昭和まで～

第五話から続く”九谷焼の歴史”後半として、明治以降の輸出工芸をクローズアップ。
「古九谷」誕生から連綿と続く、“九谷マインド”とはいかに？

「LIBRARY　秋元雄史がゆく、九谷焼の物語」とは

2020.10.24～12.20まで開催された「産地のオンラインミュージアム　KUTANism」の主要コンテンツの1つ。陶石から絵付け、そして料亭まで。九谷焼はいかにして生まれ、使われてきたのか。KUTANism全体監修・秋元雄史が、自らその現場に足を運び対話する中で、九谷焼の物語を再発見していく連載シリーズです。

Starting out as raw pottery stone, they are painted, and eventually served at traditional ryotei restaurants. Just how exactly did such Kutani ceramics come to be, and come to be used? Through this mini-series, rediscover the origins and evolution of Kutani ceramics, with KUTANism supervisor Akimoto Yuji as your on-site guide.

＼ WEB版はこちら ／

第六話

【後編】窯を超え出て生まれた名工たち
～明治から昭和まで～

九谷陶磁器史研究家・中矢進一さんに学ぶ九谷焼の歴史「後編」。古九谷から吉田屋窯といった江戸後期までをご紹介した前編に続き（前編はこちら）、後編はガラリと時代が変わって、明治以降の輸出工芸「ジャパン・クタニ」と、その象徴ともいえる「赤絵／金襴手」の世界をご紹介。

そして明治以降は「窯」という組織を超えて数々の名工が頭角を現してくる時代でもあります。古九谷から連綿と続く、産業を超えて芸術性を追い求める “九谷マインド”とは。

中矢進一さん

能美市九谷焼美術館｜五彩館｜館長。九谷陶磁器史研究家として長年に渡り九谷焼の歴史を研究して来た第一人者。1977年石川県加賀市教育委員会、加賀市美術館学芸員、石川県九谷焼美術館副館長を歴任。2006年全国5会場巡回特別展「古九谷浪漫 華麗なる吉田屋展」監修。15年特別展「大名細川家の茶席と加賀九谷焼展」（永青文庫）監修。北陸新幹線金沢開業記念特別展「交流するやきもの九谷焼の系譜と展開展」（東京ステーションギャラリー）監修。会期中上皇上皇后両陛下行幸啓に際し「ご説明役」を務める。共著に『ふでばこ（九谷焼特集）』、『九谷モダン』などがある。

職人を翻弄する、明治以降の変動

中矢：ここからは、主に明治工芸になりますね。ここで時代がガラリと変わります。
前田藩が九谷焼のスポンサーをしていた時代はここで終焉するんです。
その代わりに、明治新政府が、万国博覧会だとか、内国勧業博覧会だとかにどんどん九谷焼を出品していって、
海外から「ジャパン・クタニ」と呼ばれる時代がやってきます。

秋元：あぁ、ちょうどヨーロッパはジャポニズム（※）の時代ですからね、東洋趣味的なものを求める彼らの嗜好に、九谷焼の装飾性がウケるのは分かります。
そうなると、明治の九谷焼の需要としては、海外向けの輸出工芸と、それに憧れた国内需要という感じでしょうか？

（※）ジャポニズム…19世紀後半にヨーロッパで流行した日本趣味のこと。

中矢：はい、両方ありますね。明治時代は国内でも近代的な暮らし向きに変わってきます。
和風建築ばかりだった江戸時代から、西洋的な建築が増えてくる。そういった空間にふさわしい九谷焼というものが生まれてくるわけです。例えば、まずサイズ感が違います。

秋元：大型化していきますよね。これまでの九谷焼は器類が多かったけれど、急にインテリア的になるというか。

中矢：これは九谷だけでなく、瀬戸や伊万里でも同じことが起きていまして、この時期からサイズが大きくなってくる。西洋化が進む中での全国的な傾向と言えます。

そしてもうひとつの特徴が、“シンメトリー”であること。
この時期に輸出されたジャパン・クタニというものは一対です。
近年の「欧米からの里帰り品」を見るとほとんどがそうです。
その謎解きとして、こちらのマントルピース(※)をご覧ください。

(※) マントルピース… 洋室の壁につくりつけた、装飾的な暖炉。

西洋で好まれていたマントルピースを再現した能美市九谷焼美術館｜五彩館｜の一角。

秋元：これは非常に分かりやすい。

中矢：西洋の人というのはシンメトリーを好みますから、工芸品も左右対称に飾る習慣がありました。それを九谷焼にも求めたわけですね。

ジャパン九谷を牽引する、赤絵金襴手

中矢：そしてそのジャパンクタニを代表する様式が「赤絵金襴手」です。それまでの九谷焼のイメージであった青手や五彩手とは全く違う、“赤絵九谷”の世界がここから始まります。まずはその歴史をこちらの「朱赤の間」でご説明しましょう。

「赤絵金襴手」で描かれた大花瓶。「赤」と「金」という、この上なくめでたく華やかな組み合わせ。本源堂「彩色割取花鳥図大花瓶」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

壁面も赤い展示室「朱赤の間」

中矢：そもそも「赤絵」という技法を九谷焼に持ち込んだのは、僕はやはり京焼から来た青木木米だと思っています。江戸後期、彼が春日山窯で焼いていた期間に一番たくさん制作していたのが「呉須赤絵（※）」の写しです。

（※）呉須赤絵…中国明末につくられた赤絵。日本の茶人たちに愛好され、日本の赤絵発展に大きな影響を与えた。

秋元：あぁ、ここでもまた青木木米が出てくるのですね。
春日山窯はやはり九谷焼におけるひとつのターニングポイントだなぁ。

中矢：ただ、こちらの作品を見ていただけたらわかるように、素地に土が混ざってますよね。
春日山では陶石が出なかったので、瓦土を混ぜてつくっていたんです。

春日山窯「赤絵花鳥文大皿」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

秋元：先ほど見せていただいた明治期の赤絵に比べると、こちらは随分と素朴になりますね。

中矢：中国の呉須赤絵は、茶人の間でもて囃された時期がありました。その写しを、九谷だけでなく全国的につくっている時期があるんです。

秋元：呉須赤絵の素朴さを、日本の茶人が好むのは理解できるのですが、その「赤絵」がどんどん“細密化”していくのはどうしてなんでしょう？

小野窯「赤絵百老図鉢」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

服の文様までも、すべて細やかな線で描き込まれている。／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

中矢：それが、九谷焼の特徴なんです。他の地域でも、同じ弁柄の絵の具を使ってはいたのですが、**なぜ九谷だけがここまで細密化していったのか。**

古九谷から現代九谷に至るまで普遍的な制作信条は**「九谷は絵が命」**ということです。
他の追従を許さない、物まねでないオリジナリティーあふれる圧倒的な絵付けをすることが九谷に求められる最大のミッションなんです。まずこれが大前提です。

そこで私見ですが、水野忠邦の天保の改革、奢侈禁止令がきっかけを作ったのでないかと考えています。
将軍献上の鍋島焼でさえ単色になります。
カラフルな色絵付けが贅沢だと言って、作るのも使用するのも憚れるなら、いっそのこと赤一色で勝負しよう、としたのではないか。

九谷五彩の中で赤だけが唯一絵の具の性質上、細密描写に適している。
他を圧倒するため、自然と九谷の職人たちは細描化に向かっていったと考えます。
また、この時期の赤絵九谷を見ると作品中にところどころに加飾した赤以外の絵の具が不あがりです。

燃料の松材に使用制限が加えられたのか、窯の焼成温度が十分に上がらなかったのではないか。
だとしても赤だけは他の四彩より低い温度でもしっかりと着くという技術面の理由も、あるいはあったのではないか。

慶応年間に大聖寺藩に招聘され九谷焼の指導をした京焼の永楽和全は、それまでの雑木を燃料としていたのを、焼成温度を上げるため藩管理で燃焼効率の良い赤松材に改めさせていることから推察できます。

中矢：あとは時代の流行という面もあったと思います。**江戸後期からの日本工芸というのは超絶技巧である“細密な仕事ができる職人＝腕の良い職人”という風潮がありましたから。**
そして、この細密画をほぼ完成させた赤絵を代表する窯というのが、吉田屋窯を継いだ宮本屋窯ですね。吉田屋窯は古九谷的・青手様式が中心でしたが、その窯を引き継いだ宮本屋窯は赤絵細描九谷一辺倒になっていきます。宮本屋窯には飯田屋八郎右衛門という有名な職人がいたので、今でもこういった作風を“飯田屋風”と呼ぶんです。

宮本窯「赤絵福寿字入大深鉢」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

中矢：そして「赤絵金襴手」に欠かせない「金襴手」という技法。こちらには京都からやってきた永楽和全（※）が大きく貢献しています。永楽和全の素晴らしいところは、彼が京焼で学んだあらゆる技術を、全て九谷に教えていってくれたこと。中でも彼は“金の扱い”に長けていたんです。まるで鏡面のように面で金彩を行うという技法もそれまで九谷焼にはなく、職人達は“金ってこんな風にやるの？”と驚いたわけです。今も九谷焼における

金襴手の様式を「永楽」と呼ぶのにも、彼への敬意を感じます。
さらに、和全の作品というのは、とても洗練されているんですね。京焼ですから素地も薄くて、これまでのような鈍重さがない。ここで洗練された京焼の血が、グンッと九谷焼に入るんです。

（※）永楽和全…幕末から明治時代に活躍した京都出身の陶工。慶応年間に大聖寺藩に招かれて九谷焼を指導。
金襴手、古赤絵写し、青磁などに優れていた。千家十職永楽家12代善五郎和全のこと。

12代永楽善五郎和全「金襴手鳳凰文鉢」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

秋元：青木木米も永楽和全もそうですが、**九谷焼はときおり外から“都のセンス”のようなものが入ってきては、アップデートされていっている**んですね。
中矢：ええ、**九谷焼というものは、本当に良いDNAを歴史の中で貰ってきているんです。そして永楽和全が帰京する、明治3年頃までが「再興九谷」と呼ばれる時代です。**それ以前からある飯田屋のような細かい赤絵仕事と、煌びやかで洗練された京焼的なものがうまく合致して、新たに明治の時代を迎えます。
その立役者の一人が九谷庄三です。彼のすごいところは、今までの古九谷由来の五彩や和絵の具、幕末に西洋

から入ってきた西洋絵の具、そして永楽和全から受け継いだ金襴手―。ありとあらゆる九谷の加飾技法を、全て作品に盛り込んでいるところです。

九谷庄三「龍花卉文農耕図盤」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

作品の裏側までびっしりと絵付けがなされている。

中矢：こちらをみてください。第一回内国博覧会に九谷庄三が出品した、彼の最高峰とも言える作品です。裏までギッシリと「ここまで描くか！」というくらいに詰め込んでいる。

秋元：この凝縮感はすごいなぁ…！

中矢：ここまでくると「赤絵金襴手」とは言わずに「彩色金襴手」と言います。赤と金だけで勝負している赤絵金襴手とはゴージャスさが違いますよね。

産業を超えて、芸術性を追求する九谷マインド

中矢：そしてこの赤絵のジャンルからは、“産業九谷”の礎を築いた名工が何人も生まれています。庄三の少し前から同じく能美郡で活躍していた斎田道開（※）もその一人。彼は産業九谷の“名プロデューサーです”。全国のいろんな窯業地を巡り巡って、最終的に故郷の能美市佐野町で赤絵窯（佐野窯）を開きます。佐野窯を上絵窯とし、素地窯と別に独立させたことで、それまで一つの窯元で担っていた「素地」と「上絵」を分業化させた。まさに九谷の分業化の走りです。

（※）斎田道開…江戸時代後期に佐野の地（能美市佐野町）で「佐野窯」を開く。金をより美しく彩らせる二度焼の技法を編み出すなど、現在の赤絵佐野に受け継がれる作風を確立。制作工程の専業化も進めた。

秋元：ああ、ここで分業化が始まるのですね。

斎田道開「赤絵細描龍図徳利」／能美市九谷焼美術館｜五彩館｜所蔵

中矢：一方の九谷庄三が産業九谷の確立に寄与した功績は、前に述べた庄三風ともいえる様式「彩色金襴手」を、二百人を超えるという大勢の門弟たちに教え広めたことに尽きます。その中から名工と呼ばれる人たちが輩出し、いまにその系譜は連綿とつながっているのです。

中矢：そして、**九谷焼の特筆すべき点として、この時期から「名工」と呼ばれる職人がでてくるんです。それまでは“窯”というものが前面に立っていたけれど、近代以降になると職人の個人名が出てくるようになります。**そこには産業九谷の時代に分業化して、素地をつくる窯元と、絵付けをする上絵付師さんが分かれたという背景もあります。

秋元：しかし明治以降となると、生活様式はもちろん、戦争が始まったりと目まぐるしく時代も変わりますよね。要はもう海外に出せなくなったり。
その時代の中で作家も揺れつつ、つくるものを変化させながらも生き延びてきたということでしょうか？

中矢：そうです。大正に入る頃には海外輸出が頭打ちになって、**ならばこの窯業力をどこに向けるかとなったとき、国内需要の中で求められたのが、かつての“文人趣味”でした。**

魯山人のような文化人が活躍しているのもこの頃です。
徐々にそちらにシフトしていく中で修練されていって、そのうちに“名工”と呼ばれる人たちがでてくる。
窯や会社の名前ではなく、「〇〇さんがつくったあの作品が欲しい」となってくるわけです。

秋元：面白いですね。確かに有田などですと、窯元の名前の方が歴史の中でずっと強い印象があります。
10代続いている窯元があったりしますしね。

秋元：でも考えてみれば、今までだって「吉田屋窯」「若杉窯」とか、窯の名前で作品は出ていたけれど、それを牽引しているのは“個人”だったりしますよね。だから職人の姿勢そのものが変わったというよりも、だんだん時代が下がってくるうちに、個人の名前が自然と出てきた、という感じなんでしょうね。

中矢：そうだと思います。あと僕は、九谷には“才能を育てようとする精神構造”があったんじゃないかと思っています。パトロンのような人がいて、期待する作家に作品を発注し続けたりして、長い目で育てていた。

近代九谷の代表的作家の一人である徳田八十吉の作品を前に。

秋元：これまでのお話の随所で、**産業を超えて芸術性を追求してしまうマインドというものを九谷焼に感じますよね。**こういう“作家性”で地域を牽引して行くのって、九谷以外の産地でどこかあります？まぁ、昭和以降はどこもそういう傾向はありますけど。

中矢：瀬戸や美濃でも言えますが、どちらかというとやっぱり窯元が強い印象はあります。そういう意味では

九谷は京都に近いかもしれませんね。
秋元：なるほど、京焼は「〇〇窯」というよりも、比較的個人の名前が先に立ちますもんね。

中矢：大正から昭和にかけて、いわゆる官展と呼ばれる「帝展」「文展」そしてその流れの「日展」に、第四科として工芸の分野が入ってきます。日本陶芸界の重鎮、富本憲吉はその中心人物です。

九谷焼では北出塔次郎が早くから出品して「九谷の塔次郎」として気を吐いていました。
塔次郎は大聖寺藩窯「松山窯」の流れをくむ「北出窯」の三代目窯元でしたが、美術学校を出て、絵画やデザインを学び、九谷の近代化を目指していました。

昭和１１年、富本憲吉が九谷の色絵を研究するため、塔次郎の窯に半年間も逗留しました。
塔次郎は富本に色絵技術を惜しみなく教え、富本からは「紋様から紋様をつくらず」という制作信条を教えられます。

ここが九谷近代化のターニングポイントです。中央の美術展覧会でも十分通ずる工芸作家が九谷焼から誕生する端緒だと考えます。一方で、初代徳田八十吉のようなすばらしい九谷の伝統を守り継承する職人の中の職人である、名工達もいました。

先代の浅蔵五十吉は、古九谷の伝統色を初代八十吉に、近代的な意匠構成を塔次郎から学び、自らの個性を発揮して「日展」で活躍し、やがて国の文化功労者、文化勲章受章者となります。

三代徳田八十吉は初代から学んだ古九谷の色でもって見事な「彩釉磁器」をつくりあげ、日本工芸会、「日本伝統工芸展」で活躍ののち、人間国宝となります。

秋元：これまでひたすら作品をつくっていたのが、ここから「美術展」というフレームの中で作家が意識的に作品発表するようになるんですね。
まさに“近代工芸”の夜明けであり、芸術家的工芸作家が生まれてくる下準備が整うと。
いやぁ、今日一日で様々な気づきがあって、脳が情報過多になっています（笑）。どうもありがとうございました！

KUTANism

主催：KUTANism実行委員会　共催：能美市、小松市　協力：石川県九谷窯元工業協同組合、石川県陶磁器商工業協同組合、九谷上絵協同組合、九谷焼団地協同組合、公立小松大学、こまつKUTANI未来のカタチ、小松九谷工業協同組合　後援：北國新聞社、認定NPO法人趣都金澤

クタニズム実行委員会事務局
〒923-1198 石川県能美市寺井町た35（能美市役所 産業交流部 観光交流課内）MAIL：info@kutanism.com

クタニズム

https://kutanism.com